

ムラサキ考 — 色彩表現から探る日本文学・文化 —

A Research on "Murasaki": the color and Japanese Culture

深谷 大

FUKAYA Dai

キーワード：ムラサキ、色彩、文化

はじめに

日本人は古来、視覚表現に関心を示してきた。文学作品や芸能作品が、絵巻や絵本の形態で享受されてきたことがその証左である。単に文字だけではなく、絵を伴って楽しまれてきたのである。

本稿では、紫（ムラサキ）という色を取り上げ、文学作品や芸能作品について、日本人の色彩感覚と表現のありようを探り、日本文学と日本文化の可能性を探ってみることにしたい。

一、「紫」とは何か

紫は元来植物である。ムラサキ科の多年草で各地の山地に生息する。根は太く紫色をしており、茎の高さは三〇〜五〇センチメートル程度である。紫色をした根は、古くから重要な染料として用いられてきた。野山で見かける、ありふれた植物の根の色彩に、人々は関心を寄せてきたのである。

二、古代の「紫」——『万葉集』——

紫は和歌に多く詠まれてきた。まず現存最古の和歌集である『万葉集』（八世紀成立）を見てみよう（注1）。まず、色としての紫を考える上で重要な和歌からはじめる。

紫は、灰さすものそ、海石榴市の、八十の衢に、逢へる児や誰（巻第二一・三一〇一）

「灰さすものそ」は「海石榴市の椿」の序である。紫の染色には椿の灰から採取した灰汁を使用した。「逢へる児や誰」とは、歌垣の場での若い女性に対する問いかけで、異性に対して名前を尋ねることは求婚を意味していた。したがって、「紫染めには、灰をさす椿、その椿市の八十の分かれ道で、今逢っているあなたはどなたでしょうか」といった意となる。歌の作者が問いかけている女性は若い娘であろう。

次の二首は大人の女性、それも人妻が対象である。

紫草の、にほへる妹を、憎くあらば、人妻故に、我恋ひめやも（巻第一・二二）

「にほへる」の「にほふ」は花や女性の容姿の形容である。「妹」は額田王をさす。「故」はこの場合は逆接で、反実仮想の「憎くあらば」を受けている。「めやも」は反語である。「紫草のように、匂うあなたを憎いと思ったとすれば、人妻であるにもかかわらず、恋しく思うのであるか」の意である。

紫は、根をかも終ふる人の児の、うらがなしけを、寝を終へなく（巻第一四・三五〇〇）

「根をかも終ふる」の「かも」は疑問を表すので、「根を終わりにするだろうか」の意となる。「人の児」は「親がかりの娘や人妻。自分の自由にならない女性」のことである。「うらがなしけを」の「を」は逆接なので、「心の中で愛しく思うのに」の意である。「寝を終へなく」は「寝ることを果たせないであろう」の意味なので、全体としては「紫草は根は尽きてしまうのだろうか。人妻を愛おしく思っているけれど、思いを遂げることができないものだ」といった意味になるであろう。

右三首に読まれた「紫」は、年齢や立場にかかわらず、すべて女性を対象としている。古代日本人は「紫」に女性の姿を見ていたことがわかる。

女性をあらわす「紫」のイメージは、女性が身に着ける装束へと向かう。

紫の、帯の結びも、解きも見ず、もとやな妹に、恋ひわたりなむ（巻第一二・二九七四）

「紫」は高貴な色とされる。ここでは高貴な女性の意である。「もとや」は「わけもなく」や「しきりに」という意味なので、「高貴な女性の紫の帯の結び目さえ解いて見ようとしないうで、あの女性にわけもなくただ恋焦がれ続けているのであるか」の意となる。

紫の、我が下紐の、色に出でず、恋ひかも瘦せむ、逢ふよしをなみ（巻第一二・二九七六）

この歌の作者は女性である。「紫色の私の下着の色が人目につかないように、恋しさも押し隠したまま、身体は痩せてしまうのだろうか、お逢いする方法もないので」といった意である。

『万葉集』の紫のイメージは帯や下着にとどまらない。女性の髪飾り、すなわちアクセサリーの類にも及んでいる。

紫の、まだらの縵花やかに、今日見し人に、後恋ひむかも（巻第一二・二九九三）

「まだら」は原文では「綵色」である。「綵」は、古本『玉篇』に「鄭玄曰、有采文也」とある如く、五色の彩りや、模様をあらわす。鄭玄は後漢を代表する儒学者である。「縵」は、『万葉集』巻一〇に「霜枯れの、冬の柳は、見る人の、縵にすべく萌えにけるかも」（二八四六）とある如く、蔓や柳などの枝を輪にした髪飾りのことである。「紫の、

まだらの縷」で「花やか」の序となっている。現代風に言えば、紫色のカラフルなヘアバンドやバンドナといったところであろうか。まさに「今日見し人」が紫色の彩り豊かな髪飾りをしており、その髪のアクセサリーに魅かれたのである。「紫色に染めた彩りが綺麗な縷のように、華やかで素敵な今日見た女性を、後で恋い慕うであろう」といった意味の和歌である。

三、中古・中世の「紫」―『古今和歌集』ほか―

次に中古、平安時代の「紫」を見てみよう。最初の勅撰和歌集である『古今和歌集』（二〇世紀初成立）の歌である。

紫の一本ゆえに武蔵野の、草はみながらあはれとぞ見る（巻第一
七・雑歌上）

「みながら」は「残らず」「すべて」の意で「あはれ」は感動詞である。紫草という植物への感動を詠んだ歌で「たった一本（一株）の紫草があるために、武蔵野のある草がすべていとおしいものに見えるものだ」の意になる。

『顕注密勘』（一三世紀初成立）は「紫の一本ゆえ（中略）紫のゆかりともよむなり」と記す。「紫」が縁、ゆかりを表す語として用いられている。『顕注密勘』は、藤原定家（応保二年〔一一六二〕〜仁治二年〔一二四一〕。歌人）による『古今和歌集』の注釈書で、顕昭（平安末鎌倉初の歌人。生没年未詳）の『古今集註』に定家の説を注した書である。書名は、顕昭の注に定家が密勘を加えたことに由来する。

右の読み人知らずの歌を踏まえて業平朝臣の歌が続く。

妻のおとうとを持って侍りける人に、袍をおくるとてよみてやりける

紫の、色濃きときは目もはるに、野なる草木ぞ、わかれざりける

「妻」は歌の作者の妻、「おとうと」は作者の妻の妹をさす。袍うわぎは男子の正装なので、「私（作者）の妻の妹を妻としていた人に、男子の正装の袍を差し上げるといって詠んであげた」歌である。

この歌の「紫」は作者の妻、すなわち女性を表している。「紫の色濃きときは」は、「植物としての紫草の根の色が濃厚な時は」の意で、前述した染料としての紫色の「濃さ」と、作者と義弟の妻同士が姉妹であるという血縁関係の「濃さ」を掛けた表現である（第二節、『万葉集』巻第一二・三二〇一参照）。「目もはるに」は「目も遙に」で「芽も張る」に掛けており、続く「草木」の縁語となっている。「野なる草木」は歌を贈った相手、すなわち作者の妻の夫である義弟に譬えている。「染色のもとになる紫草の色が濃い時分は、「紫の一本ゆえに」と古歌にある如く、目もはるかに見える芽を張っている野山の草木までも、紫草と同様に懐かしく思われるもので、姉妹関係にある女性を妻に持つ私（作者）とあなた（義弟）が濃い紫色と同じ様に懐かしく親しみを抱くのもっともなことでしょう」といった意となる。

右の歌の「紫」も万葉集以来の伝統を受け継ぎ、女性を示している。室町時代語研究の資料として、最も重要視されている『日葡辞書』（慶長八・九年〔一六〇三・一六〇四〕成立）に「ムラサキ。すなわち、ヲナゴ」「ヲナゴ（訳）婦人」とある如く、中世の「紫」は女性の別称であった。

四、近世の「紫」(一) — 「紫帽子」 —

近世、江戸時代ではどうであろうか。まず「紫帽子」に注目してみたい。「紫帽子」は歌舞伎の女方の被り物で、女方の象徴であった。『役者全書』下巻(安永三年(一七七四)刊)は次の如く記す。

歌舞伎にて用ゆる紫帽子は、そのかみ鳥居庄七といふ女形はじむ。是びらりとさげてきせたるよし。(中略) 其後、元禄の比、加茂川のしほ、水木辰之助工夫して、縮緬にて拵へ、色は紫に定めた

り
若衆歌舞伎禁止後、前髪を剃って野郎頭にして演じた野郎歌舞伎において、女方役者が野郎頭に乘せた帽子状の被り物が、「紫帽子」のルーツと説く。もとは野郎帽子といい、若衆が剃った前髪を隠すため頭に被った手拭いがはじまりであり、他に綿なども用いられた。その後「びらり帽子」や「紫帽子」となる。ともに「紫色」の縮緬による被り物で、「紫色」の被り物が女方のシンボルとなった。「びらり帽子」は「ひらり帽子」とも呼ばれ、風に吹かれると揺れることが名称の由来である。紫縮緬で額を覆って左右に垂らした被り物であり、町人の婦女子にも流行した。

『役者全書』下巻に「水木帽子 是水木辰之助はじむ。其比専はやりし也」とある如く、元禄期(一六八八—一七〇四)の名女方・水木辰之助の「紫帽子」は役者名を付して「水木帽子」と呼ばれ、特に有名であった。

五、近世の「紫」(二) — 「紫鉢巻」 —

「紫色」の被り物に続いて鉢巻に注目してみたい。「紫鉢巻」といえば助六が想起されるであろう。歌舞伎『助六』の台帳、主人公・助六の出(登場場面)みてみよう。

巻橋 助六さん、その
皆々 鉢巻はへ
助六 この鉢巻の御不審か

上るりへこの鉢まきは過しころ、由縁のすぢの紫の、初元結をまき初し、初冠の若松の、まつのはけさきすき額、つゝ、み八町風そよぐ、草に音せぬ塗りばなを、一ツ印籠一ツまへ、二重まはりの雲の帯、富士と筑波の山合ひに、袖ふりゆかし君ゆかし

「上るり」(浄瑠璃)、すなわち『助六』の伴奏音楽である河東節の詞章に「由縁ゆかりの筋の紫の」とある。この詞章は、前掲『古今和歌集』の「紫の一本ゆえに武蔵野の、草はみながらあはれとぞ見る」によっている(注2)。「古今和歌集」の注釈書『顕注密勘』で藤原定家が注した如く、紫は縁、ゆかりの色であり、「ゆかりの筋」とは助六の恋人の花魁・揚巻をさすと解するのである(第三節参照)。

平賀源内(本草学者。戯作者。浄瑠璃作者。享保一三年(一二七八)〜安永八年(一七七九))の『根無草』(宝暦一三年(一七六三)刊)に「紫帽子の、ゆかりの色」とある如く、第四節で前述した、歌舞伎の女方のシンボル「紫帽子」の「紫色」も、「紫鉢巻」と同様に、縁、ゆかりの色であり、『万葉集』以来、女性を表現した「紫」が、中古・中世を経て、近世に受け継がれていることがわかる。

六、近代の「紫」(一) —紫衛門—

近代になるとどうであろうか。明治・大正期に「紫衛門」と呼ばれた人たちがいた。女学生の異称である。名前の由来は、この頃の女学生の袴に紫色が多かったことから、和泉式部と並び称された、平安時代の女流歌人・赤染衛門(中古三十六歌仙の一人。生没年未詳)をもじって、「紫衛門」と称されたのであった。「紫色」の袴が女学生のシンボルであった。「紫」イコール「女性」の方程式は近代を迎えても変わらず生き続けていた。

七、近代の「紫」(二) —紫節—

右の紫衛門の「紫の袴」は流行歌に歌われた。明治四四年(一九一一)頃から大正初期にかけて流行した「紫節」である。元唄とされる歌詞を見てみよう。

紫の袴ゆかしき姫君が、行く先いづこ、

実にのどかなる春の日に、上野、向島、飛鳥山

散れ／＼散るならさつと散れ、サットネ

囃子詞が「サットネ」や「ホンニネ」であることから、「さとね節」「ほんにね節」などとも呼ばれた。囃子詞は、流行歌や俗謡において最も耳に残るフレーズである。

『万葉集』における「紫色」の帯や下紐、更に「縵」、歌舞伎の「紫帽子」や「紫鉢巻」と同様に、袴の色が「紫色」であることが女性を示す重要な要素であることがわかる。

八、現代の「紫」—文化のグローバル化をめぐる—

多様な価値観が行き交う現代社会において、「紫色」は女性を表現する色として生き続けているのであろうか。日本ではなく韓国のK-POPの世界に注目すべきフレーズがある。

K-POPといえはBTS(別称・防弾少年団。略称・バンタン)の人氣は絶大である。日本にも多くのファンがいる。アイドルとしての活動だけではなく、政治的、社会的な発言でも知られる。リーダーのキム・ナムジュンの国連におけるスピーチ(二〇一八年九月二四日)や、韓国の徴兵制への対応などが話題となり世界的に注目されている。まさに国際的なアイドルグループである。

BTSのメンバーのテテこと、キム・テヒョンが「ボラヘ」という言葉をファンに対して発している。「ボラ」は韓国語で「紫」を表す。紫色は「ボラセク」である。「ボラヘ」はテテによる造語で、日本語では「ムラサキするよ」の意である。テテは造語作りの達人で、いろいろな言葉を生み出しており、それらの造語はファンの間ではテテ語と呼ばれている。「ボラヘ」は虹の色からのテテの連想とのことだが、英語で言えば「I PURPLE YOU」で「I LOVE YOU」を意味している。「I LOVE YOU」の「I」はテテで「YOU」はファンである。BTSのファンはARMYと呼ばれ圧倒的に女性である。「ボラヘ」つまり「ムラサキするよ」は、まさに女性に向けた愛情表現なのである。

英語の「PURPLE」は「華麗」「王権」「高位」といった意味である。前記の「紫の、帯の結びも、解きも見ず、もとやな妹に、恋ひわたりなむ」(第二節、『万葉集』(巻第一二・二九七四))の如く、「紫」は日本においても、貴い、高貴なイメージを持つ。次の和歌を見てみよう。

紫の雲のよそなる身なれども、たつときくこそ嬉しかりけれ

平安時代末期の四番目の勅撰和歌集で、八代集の一つである『後拾遺和歌集』（応徳三年（一〇八六）成立。巻七・賀・四六〇）である。「むらさきの雲」つまり「紫雲」は御目出度い雲のことであるが、右の歌では、皇后の異称として用いられている。

順徳天皇（建久八年（一一九七）—仁治三年（一二四二））による、鎌倉時代前期の歌学書『八雲御抄』『第三 枝葉』も「后、むらさきの雲。しりへの宮」と記す。「しりへ」は後、後方で、「しりへの宮」は後宮、皇后などの住まいをさす。

BTSのメンバーのテテの造語「ボラへ」、日本語では「ムラサキするよ」は虹色からの連想によるとされる。現代日本では虹といえ七色と考えるのが一般的であろう。赤、橙、黄、緑、青、藍、紫の七色である。テテも「紫を虹の最後の色」と言っていることから、虹色に対する認識は日本人と同じと考えてよからう。

虹の色は五色説、六色説、七色説など議論があり、時代や民族によって一定しない。イギリスやアメリカでは藍を除く六色、ドイツや中国では藍と紫を除いて五色であるとされる。様々な価値観や感性がひしめく現代社会において、虹の色の中に「紫」を見る色彩感覚に関して、日本人と韓国人との類似が見られることは興味深い。

結び

以上、「ムラサキ」について、古代から現代までの文学作品や芸能作品に見られる表現を時代順に追うことで、日本人の色彩感覚や色彩表現の変遷をとらえてみた。その結果、紫や紫色に女性、それも高貴な

女性を見る発想が古代から近代まで変わらず生き続けていたことが明らかとなった。高貴で高位な女性に対する尊敬の念が「ムラサキ」には込められていた。

女性への愛情と尊敬を示す「ムラサキ」のイメージが、海を越えた韓国文化に垣間見られることは興味深い。「ムラサキ」という色が国境や民族を超えてイメージされている。

本稿で検討した、古代から近代まで続く「ムラサキ」のイメージを、日本のみならず世界的視点でとらえ直すことで、新たな日本文学と日本文化の可能性が見出せるのではないかと考える。

注

1 『万葉集』『古今和歌集』など、本稿で扱う文学作品の解釈は、『新日本古典文学大系』（岩波書店）、『新日本古典文学全集』（小学館）、『新潮日本古典集成』（新潮社）はじめ、先覚の研究を参照し作成した。なお、和歌をはじめ原文の表記は私に漢字をあてるなど、読み易さを考慮して処理を施している。

2 『日本古典文学全集98 歌舞伎十八番集』（郡司正勝校注、九二頁・頭注一一、岩波書店、一九六五年）。

謝辞

早稲田大学演劇博物館はじめ、資料の閲覧に際して、ご配慮をいただいた所蔵機関・ご所蔵者の皆様に、心から御礼を申し上げます。